
草汰と又吉の旅日記

石川 乃牡硫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草汰と又吉の旅日記

【Nコード】

N6223J

【作者名】

石川 乃牡硫

【あらすじ】

小さい頃病気がちだった草汰。中学時代に自分の旅ブログがきっかけで、とある新聞記者と仲良くなる。そして旅日記を書くことになり、その旅で一匹のネコに合う。そして一人と一匹の旅が始まるが…。2つの視点で織り成す現代的ストーリー！。

第一章：仕事のきっかけ（前書き）

久しぶりに手がける作品です。去年から温めていた作品なのですが、なかなか先が思い浮かばない今日この頃です。気が向いたら更新するといった具合にのんびりやっていこうと思っていますw

第一章：仕事のきつけ

私は旅をするのが好きだ。

小さい頃病気がちだった私だが、中学校に入るぐらいから病気も良くなり、学校を休む事もなくなっていた。

そして普通に学校に通い始めたのだが、それまで学校が休みがちだったせいで勉強についていけなくなっていた。

病気がちだった頃、家族で行った親戚のうちへの旅行が私を旅好きに変えたのだった。

家族でいる時しょっちゅうその旅の話をする私を見て、病気が良くなってから土日になると家族での旅をするのが習慣になった。

中学校は地元の学校へ入学したのだが、全く授業についていけなくなっていた。

中学校に入学したぐらいからネットで旅の事中心のネットブログを書くようになった。

旅の事以外にも空想や実家で起こった事なども書いた。

中2の頃、そのブログがあるとある新聞記者の目にとまった。

その新聞記者としょっちゅうメールのやり取りをしていてだんだん仲良くなっていった。

そしてある時その記者が一つの提案をしてきたのだった。

それは『私社の新聞に枠を取って旅の連載日記を書いてみないか？』との事だった。

様は『高校に入学せずに記者からの道しるべにしたがって旅をし、その日記を新聞でのつけないか？』という事だった。

私はまず自分で考え、まとめ、そして親に相談した。

親は「自分を信じて、考え、そして行動しなさい。」と言った。

それはその旅日記に関しての了承だった。

そして親は「人と違った生き方は大変だぞ。」と付け加えた。

そして私は決心した。

高校には進学せず、ライターになる事を。

中3の時、周りは進学の勉強の真つただ中、私はほとんど本を読んで過ごした。

そして3月、大体の新聞に書く日記の内容や日程が決まった。

タイトルは『草汰の旅日記』と決めた。

それは『新聞記者に指定された地元北海道のお年寄りがいる家に2週間同居し、毎日日記を書く。そして2週間の最後には大きなまとめの記事を書き、その後一週間実家に帰って休みをもらう』という3週間を一つとしたサイクルの日程といった内容だった。

私は意外と簡単な事だなと思った。

それは後々見聞の浅さゆえの考えだなと思い返されるのだが…。

ま、それは後々の事である。

その楽観した考えは長所でもあり短所でもある。

何はともあれ一人の旅が始まった。

第二章：初めての仕事&2軒目

4月の始め、初めてのライターとしての仕事の一軒目の家である。

「2週間の始まりだなー、楽しみー。」と私。

そんな感じで一軒目の家に行った。

最初の家はおじいさん・おばあさん、父、母、娘という家族構成の家だった。

その家のおじいさん・おばあさんは元気で、私は特におじいさんに付いて行った。

着いたその日、早速おじいさんと話をする。

そのおじいさんは物腰柔らかで話しやすかった。

若い頃は本州でサラリーマンをしていて、定年になり北海道に移住してきたとの事だった。

今ではもっぱらゲートボールが趣味で、ほぼ毎日やっているらしいかった。

次の日、一緒にゲートボールに行った。

私はルールがわからず、ただおじいさんは強かった。

ゲートボールの間の友達と仲良くお茶している時の楽しそうな笑顔が印象的だった。

最初の一週間はおじいさんと過ごした。

そして次の一週間はおばあさんと過ごす事にした。

新聞記者の人は行く場所は決定するが、それ以外の行動は自分で考え行動する事になっていた。

そしておばあさんとの一週間が始まった。

おばあさんはものすごく話し好きだった。

そしてほぼ毎日、同年代の集まりに行っていた。

私が最初付いて行った時、すごくかわいがられた。

自分のおじいさん・おばあさんは私が小さい頃亡くなっていた。
なのでおじいさん・おばあさんはこんなに優しいのかと思った。

2週間はあつという間に過ぎた。

そしてまとめの日記では、その生活体験やおじいさん・おばあさんの楽しそうにしていた場面を中心に記事を書いた。

そして一週間休みをもらった後、次の家へ行くのだった。

旅の最中は休みの日無しの記事だが、反響がすごかった。

主な感想は『斬新だ』とか『記事の視点が面白い』などだった。

私はとっても嬉しかった。

そんなこんなで2軒目の家だ。

家族構成は前の家と同じだった。

今回の家は農家だ。

春のこの時期、その家ではおじいさん・おばあさんも家の労働力
になっているのである。

時期的に野菜の種まきの季節だった。

その家のおじいさん・おばあさんは70歳以上になるのだが、若い
人に負けないぐらいの働きぶりである。

その一緒に働いている時にふと思った。

『自分の仕事がある・やる事があるのが元気の元になっているので
は?』と。

その家では野菜作りの大変な所や喜びなんかを教えてもらった。
私もその家ではおじいさん・おばあさんに負けないぐらい働いて、
そして2週間はあつという間に過ぎていった。

おじいさん・おばあさんは「収穫時期にまたおいで。一緒に食べま
しょうね。」と約束してその家を離れるのだった。

まとめの記事にはおじいさん・おばあさんに教わった野菜の育て方を中心に書いた。

記事の合間合間におじいさん・おばあさんとの会話を入れたりするところとかが独特だねと新聞記者の人に言われたのが嬉しかった。

第三章：不思議なネコ

そうして3軒目の家に行った。

その家は北海道でも都会で、おじいさんとおばあさんの2人きりの家だった。

最初来た時は前の2軒の家同様、温かく迎えられた。

しかし一週間ぐらいしたある日である。

2人の喧嘩の声で目が覚めた。

着替えをし居間に行ってみると2人が喧嘩をしていた。

とげとげしい部屋の空気がピリピリ伝わってくる。

そうして仲裁に入った時である。

おじいさんが私を突き飛ばした。

私は浅はかだった。

たかが中学を卒業したばかりの若造がおじいさんに意見するなどおこがましかった。

私はその家から泣きながら飛び出した。

そこでどこをどう走ったか、どこかの公園のベンチで一人泣いていた。

『ナーゴ』

その時である。ネコのきたない声が聞こえた。

泣き顔を上げて前を見てみると、一匹のトラネコがこっちを見ていた。

『ナーゴ』

そうもう一声鳴いて、私の太ももの上でゴロゴロとのを鳴らしながら寝だした。

春の朝、公園の木漏れ日の中、ネコとベンチで2人きり。

そう考えてると涙は止まっていた。

「戻ろう。」そうつぶやき立とうとしたが、まだネコが太ももの上

で寝ている。

私はそのネコが起きるまで時の流れるまま、たそがれるのであった。昼頃、『もうそろそろおながが空いたなー』と思っていると、そのネコが起きた。

私の太ももから下りて座りながらこつちを見ている。

私は「ありがとう。」とそのネコにつぶやき、2人の家に戻る事にした。

しばらく歩いて立ち止まりふり返る。

と、そのネコがなぜかトコトコと付いて来てた。

私は「一緒に行くかい？」と言うとそいつは『ナーゴ』と鳴いた。それを聞いてそのネコを抱えて2人の家に戻るのだった。

帰り道がわからない…。

どこをどう走ってその公園まで来たのかわからなかった。

なので、近くにあった交番に2人の家を訪ねた。

すると『君に搜索願いが出ている』と言われた。

おじいさんは私が飛び出して行った後、心配してすぐに警察に届け出たらしかった。

私は「一人で帰れます。」と警察官の人に言い、そのネコと帰るのだった。

おじいさん・おばあさんの家に着いた。

おじいさんは『ムスッ』としていた。

おばあさんは「ごめんね。」と何度も涙を流して私に謝った。

私は「新しいお客さんだよ。」と、あのネコを見せた。

おばあさんは「あれま！うーん。でもこの家、ネコは飼ってはだめなんだよね。」と言った。

仕方なく私は「ここでお別れだね。」と玄関でそのネコと別れた。

第四章：ネコ日記（又吉日記）

<ネコ日記>

私はネコ。名前は付けられてない。

今日もいつものように自分のテリトリーを巡回中である。

あ、そういえば今日はいつも食べ物を与えるあの店に行つてなかったな。

帰りがけ寄つて行くか。

おや？いつものお気に入り場所に誰か座つてる。

おいらのお気に入り場所なのに。

私は一言鳴いた。

おや？どうやらその人は泣いている様だった。

その人はどける気はないらしい。

仕方ないと一声かけてその人の太ももの上で寝る事にする。

お？案外、寝心地が良い。

ゴロゴロゴロー、のども鳴るぜ…。

木漏れ日の中、すやすやと眠るおいら。

昼頃、その人のちよつとした揺れで目が覚めた。

そういえば今日は飯を食べていないことに気が付く。

その人の太ももから下りてその人を見る。

そうして考えた。

この人に付いて行つたら何か貰えるかもしれない。

なのでその人に付いていくことにした。

しばらく歩いてその人が立ち止まった。

そしてふり返る。

そしてその人は何か言った。

飯をくれるんだなとおいらは思い一声鳴いた。

するとその人はおいらを抱えて歩き出したのだった。

少し歩いていくと、私を置いてとある建物の中にその人は入っていった。

しばし待つ。

そしてその人が出てきてまたおいらを抱えて歩き出す。

どうやら家に着いたようだ。

なにやらその人が家の中の人と話をしている。
おいらは飯を食えればどうでもいいんだが…。

話はついたようだ。

なにか言っておいらは玄関の外に出された。

どうやら飯はくれなくて無駄足だったようだ。

朝行きそびれたいつもの店に行つて何かもらおうと。

また明日、この家に来てみようと。

<ネコ日記終了>

第五章：おじいさんの散歩

次の日、気分転換に外へ出ようと玄関の戸を開けると、あのネコがいた。

「昨日ぶり！ご飯いる？」と私。

『ナーゴ』

「おやまあ、昨日のネコちゃん。」おばあさんが出てきて言った。

「何かあげれるものないですか？」とおばあさんに私。

「ご飯に味噌汁をかけたネコまんまでいいかしら？」

そうしてそのネコはネコまんまを食べると私に一鳴きしてどこかへ行ってしまった。

「現金なネコだね。」とおばあさんと笑ったのだった。

おじいさんに突き飛ばされた日から、私はおじいさんが怖かった。そして私とおじいさんの仲裁相手におばあさんが入るという構図ができた。

突き飛ばされた次の日はほとんどおじいさんとしやべらなかった。

次の日、玄関を開けるとまたそのネコはいた。

「またいたの？ご飯食べてく？」と私。

「おや。今日も来たのかい。草汰君によほどなついたんだね。」

「そうかな（笑）。名前付けないと。」

「そうだね。又吉なんてどうだろう。どうせまた明日も来ると思うし。」とおばあさん。

「又吉、良い名前だね。…うん。それじゃあ今日からお前は又吉。」

『ナーゴ』返事をしたようだった。

そうして又吉は飯を食い、またどこかへ行っただった。

その日、おじいさんとこのままの関係ではだめだと、何かを変える

ためにおじいさんと一緒に散歩をしようと本人に提案した。

おじいさんは「いやだ。」と言った。

昼食を食べた後の昼頃、おじいさんは私に「散歩するか。」とつぶやいた。

そうして2人で外に出てみると、又吉が玄関前で日向ぼっこをしていた。

起こされて迷惑そうな又吉。

「又吉も来るか?…って付いてくるわけないよな。」

私はそういいつつおじいさんと歩き始める。

すると、なぜか又吉も付いてきた。

そうしてあの公園に着いた。

思い出すかのようにその時の事をおじいさんに話し始める。

その時の又吉との話を話す時は、おじいさんは声を出して笑っていた。

そして一通りおじいさんは話を聞いた後、一言「ごめん。」と私に言った。

「何も変化のない生活に嫌気がさしていたんだ。」と、素直に私に言った。

そしてしばらく無言の時が過ぎた。

公園では又吉がいろんな人のところへ行き、なでられていた。

又吉は誰にでも愛想良く、かわいがられてた。

時は経ち、夕暮れ時、2人家に帰るのだった。

私は夜、その日のあった事を忘れないよう、記事とは別にノートに書き留めてから寝るのだった。

第六章： 又吉日記2

<又吉日記2>

あの泣いていた人と初めて会った次の日、また自分のテリトリーを巡回していた。

そういえば昨日行ったあの家も寄っていくか。

なんとなく気になるんだよな、あの泣いていた人。

という事で到着！

おや？なんか中からがさごそ音がするぞ。

『ガチャ』

昨日のあの人が出てきた！

おいらを見つけて何か言ってる。

おや？おばあさんが出てきた。

お？！飯だ飯だ。

どれどれ、おお！これは黄金のレシピ、ネコまんま！

<ただいま食事中。しばらくお待ち下さい。>

シート。食った食った。

おいらは『ありがとよ！』と言ってまたいつものテリトリー巡回に戻った。

次の日。

また飯を食いに来てやったぜ！

つと、いい感じに家の人が出てきた。

何回も又吉と2人が連呼している。

どうやらおいらの名前が又吉に決まったらしい。

良い響きだ。嬉しいぜ！

今日も何かくれるのかな？

待っているとまた飯が出てきた。

そうして飯を食ってテリトリー巡回に戻った。

その日の昼頃。

今日はテリトリー内にならず者がいて追い払うのに一苦労したぜ。

あーあ。今日は天気が良いな。

そういえばまたあの人に会いたいな。

あの家に行けば会えるかな？

その家に着いた。

しばらく待ったが出てくる気配がない。

天気も良いしこの玄関、意外に日当たり良いんだよな。

昼寝しよつと。

『ガサゴソ』『ガチャ』

お？玄関を開ける声。

あの人に会えた。

今日は良い日だなー。

初めて見るおじいさんもいる。

どっか出かけるのかな？

暇つぶしに付いていこつと。

公園に付いても2人は何もしないでベンチに座っていた。

最初はその2人を見ていたんだけど、飽きて公園にいるいろんな人にすりすりした。

なでられて気持ち良いなー。

そんなこんなで私たちの日は過ぎてった。

<又吉日記2終了>

第七章：願い

そうして期限の2週間はあっという間に過ぎた。

来た時には気付かなかったが、あの事件からか、おじいさん・おばあさんのいたたまれない空気を感じるようになった。

2人との玄関での別れ際、おばあさんは「行かないで。」と泣きつかれた。

でもこの2週間は決められたことなので、私にはどうすることもできない。

仕方なく玄関を出た。

駅へ向かい歩いている。

ふと視線を感じ、来た道を振り返る。

『ナーゴ』又吉がいた。

何かを訴えかけるような又吉の目。

しばらく又吉と見つめ合う。

『このままではこの町を離れられない』又吉の目を見ているとそう思えた。

「よし！決めた！おじいさん・おばあさんの家に戻ろう！」

そうつぶやき、2人の家に戻った。

『ピンポーン』ベルの音。

「はい。どなた？」と暗いおばあさんの声。

「僕。草汰。」と私。

「え！？おじいさん、草汰君、帰ってきたよ！」とおばあさん。

ドタドタと音がした後、2人に玄関で迎えられた。

おじいさん・おばあさんには言わなかったが、このまま私が実家に帰ってしまったらまたあのトゲトゲした空気が漂うと思った。

私は何とかしないと帰れないと思った。

その事は言わずに「もう少しこの家に居ていいですか？」と聞いた。
「あたりまえじゃない（笑）。少しといわずにいつまでも居なさい。
」とおばあさん。

私は期限を決めずに、2人のそばに居ようと思った。

そうして次の日、まとめの記事を書いた。

内容は『おじいさん・おばあさんの生活は社会から孤立してこれといった変化がなく、2人の関係はトゲトゲしてました。どうすれば2人は社会参加ができ、楽しく笑顔で過ごせるようになるか考えています。』という2人に許可をもらってのその事について初めての告白文や又吉の事だった。

そしてその記事の最後に『私の力では一緒に居る事ぐらいしか出来ません。この記事の読者の皆さんの考えや力をください。お願いします。』と締めくくった。

第八章：記事の反応

その記事は書いた次の日に新聞記者さんに載せてもらった。そして、その載せた日からすごい反応があったようだった。

まず反応はネットや新聞社へのFAXが中心だった。

ネットではメールでたくさん来たらしく、自分のノートパソコンに全て転送してもらった。

中には『何良い子ぶりっ子してるんだ、テメー』などひどい中傷文もあった。

記者の人は「メールは全て送ってある。ひどい内容も全て送った。君に全て知ってほしくて。あまりにひどい中傷文は無視しなよ。」と言われた。

そして「君の思うように行動してほしい。私は君の味方だという事を忘れないでほしい。」と付け加えてくれた。

FAXで送ってもらったメールの中には思った以上にお年寄りが都会で孤立しているといった内容のメールが多かった。

そして今住まわしてもらってるおじいさん・おばあさんの家の地域の反応が多かった事にびっくりした。

それはおじいさん・おばあさんと同年代のFAXが最も多く、いくつか私と同年代ぐらいの近くに住む若い人でそういった社会に不安を感じている人のメールもあった。

私はまず同じ地域の私と同年代ぐらいの人と会ってみることにした。落ち合うのは次の日の朝9時半に、とある喫茶店で会う事になった。

次の日。

「それじゃあ、行ってくるね!」と私。

「行つてらっしゃい。」とおばあさん。

2人には『近くの喫茶店で友達と待ち合わせしている』と言ってあ

った。

それで玄関にいる又吉。

「おばあさん、又吉にご飯あげといてね。」と声をかけ出かけるの
だった。

めずらしく又吉は付いてこなかった。

第九章：モフさんとの出会い

待ち合わせ場所には約束時間の15分ぐらい前に付いた。
カフェオレを注文しながら待つ。

なかなかそのカフェオレはうまかった。

待ち合わせ時間の5分前、一人の客が入ってきた。

店内には何人か客が居たので立ちっぱなしでメールを打つその人。
私は「モフバーガーさんですか？」とすかさずたずねた。

その人は「はい、そうです。あ、あなたが草汰さん？」と言った。
「そうです。よろしく願います。」と挨拶した。

そうして2人、席に着く。

モフバーガーさんは私より年が2つ上で、しっかりしてそうな雰囲気だった。

「毎回草汰さんの記事日記はかかさず見てますよ。」とモフさん。

「ほんとですか？つたない記事読んでもらってありがとございます。」と私。

「いや、面白いですよ。又吉にも会いたいですよ。」

「あはははは（笑）。」と2人笑う。

モフさんはアメリカンを注文し、早速本題について話す。

「都会って集会とかいったお年寄りの集まりないんですね。」と私。

「そうだね。そういえばこの地域でそういった場所は聞いた事がないです。」とモフさん。

「何とかできないんでしょうかね。一人じゃ僕、何もできない。」と私。

「私の家もおじいちゃん・おばあちゃんいるけど、父や母がいるからそういったこと考えた事なかったです。」とモフさん。

それから2人でどうすれば良いか考えた。

そしていくつか案が出た。

<1つ目>集会所を作る。

この集まる人の年代はむしろ決めず、大きな集会を開くといった感じだ。

形式的なものにとらわれず、お茶会といった感じのいろんな人と話を楽しむ場所だ。

そこで集まった人達と<2つ目>サークル(同好会)を作る。

例を挙げれば、音楽や俳句、囲碁や将棋などの分けられた集会所を作るといった感じだ。

その同好会の活動や人を集めるといった目的で<3つ目>非営利目的の情報新聞を作る。
といった感じだ。

その事を実行するためにどうすれば良いか考えた。

そして3つの選択肢を2人で考えた。

<一つ目>行政の長に交渉してみる。

これは一番手っ取り早いと思った。

まず初めに実行してみようと2人の意見がそろった。

違う手段<二つ目>自分で記事日記を書いているんだからその新聞の記事で募金や手伝いと呼ばける。

これは考えてみたが廃案になった。

なぜならば手伝い(ボランティア)を募集するのはともかく、募金を集めて活動するにしても自分はそんなに実行力はないと思ったし、お金は自分で呼びかけることでの責任があるし、その事での他の人のお金を自分で使い方を決めるのにすごい抵抗感があったからだ。簡単に考えても実行委員はボランティアでいいかもしれないが、人が集まるための集会所を借りるにはやはりお金がかかる。

という事で<三つ目>の案。その地域のボランティアで実行委員を作り、集まった人達で会員制にし、お金を集める案だ。

良い案だと思っただが、活動するためには人が集まらなければお金の面とかで開けない。

それにお金の管理だって下手すれば出先不明になったりするかもしれない。

それならば行政で活動する最初の案がいいと言っ結論に至った。

などという話合った。

他にも学校を交流の場の一つにするとか、聞いた話ではやっているところもある案だが学生が社会参加の一環としてお年寄りだけの核家族を訪問するという案も上がった。

どちらの案にしる上の合意がなければ実行できなさそうな案だったので、まず集会所を作るといった案を実行するために地域行政の長と話し合いをする事にした。

といった形で2人で考え、ノートにまとめ、散会になった。

帰り道、又吉に会った。

又吉は知らんぷりをしていたが、あれは又吉に違いなかった。

又吉はどっかの家の塀からその家の庭に入っていた。

私はそれを見て「よし！！頑張るか！」とつぶやき2人の家に帰るのだった。

私はその日の夜、記事日記を書きながらモフさんと話した案をどう実行していけばいいか考えた。

まさか自分から役所に行つて「市長に会わせてください！」と突撃するわけにもいかない。

そう考えているとこの間の新聞記者さんの『私は君の味方だということをお忘れしないでほしい』と言っ言葉がよみがえった。

そして自然と新聞記者さんに電話をかけたのだった…。

第十章： 又吉日記3

<又吉日記3>

2人とおいらで公園に散歩へ行った日から数日たった。

毎日おいらはその家でご馳走になってた。

いつも美味しいまんまをくれる3人に感謝・感謝だ。

ん？おいらは情に熱いのさ！知らなかっただろ？

ある日、あの若僧の雰囲気飯をもらう時いつもと違った。

それにおいらが食べているのを食べ終わるまで見ていた。ちょっと気持ち悪い。

食べ終えてもおいらを見ている若僧を見てすりすりしてみた。

その後の泣きそうな若僧の顔は今でも忘れない。

若僧が家の中に入っても気になっておいらは玄関から離れないでいた。

昼過ぎになった。

『ガサゴソ』『ガチャ』玄関の戸が開く音。

おいらは軒下にいたが音に気付き、どこかへ行こうとする若僧に付いて行った。

私は解った。その若僧とこれで別れるという事を…。

少し歩くと不意に若僧が振り返った。

そして若僧はおいらを見つけ目を見つめた。

『行っちまうのかよ！』おいらは叫んでいた。

そのおいらの言葉には『あのおじいさん・おばあさんを置いて！』という意味も含んでいた。

実はおいらもうすすず感じていたんだよ。あの空気を。

そしておいらの声を聞いて若僧は『ハッ』とした顔になった。しょぼくれた若僧の顔がどんどん『キリッ！』となっていく。

おいらの思いは伝わったようだ。

若僧は一言つぶやくといつもの家に戻っていった。

おいらは若僧が家の中に入るのを見てから昼食をもらったための巡回に行ったのだった。

そして3日後、いつも通りその家に行く。

いつもより早い時間に『ガサガサ』という玄関の音。

そして若僧が出てきた。

なんとなく目が合う。その目は生き生きしていた。

若僧はどっかに出かける様だった。

おいらは『別に付いていかなくてもいいか』とおばあさんに飯をもらった。

そしてしばらく時は経ち、巡回中、若僧を見かけた。

たぶん方向的に用事を済まし家に帰るのだろう。

別にたいして用はなく、無視して巡回を続けるおいらであった。

<又吉日記3終了>

第十章： 又吉日記3 （後書き）

小説を楽しみにしてくださっている方、こんばんにちは。ちよろつと私的なことで小説書くのが進んでおりません。

ので、今回の更新で少し間が空いてしまうと思います。

頑張って最後まで書きたいのですが、いかんせんペンが走らない状況です。

ま、とにかくゆっくりと今の小説の先を考えていこうと思っております。

という事で次の更新までアディオス・アミーゴ（意味は知りませんw）！

第十一章：一通のメール

2日後、市長さんに会ってモフさんとの話を実行するために市役所に向かっていた。

モフさんと会った日、担当の新聞記者さんに電話をした。

そして記者さんにモフさんと考えた案を話した。

すると記者は「明日の夜、そっちに連絡入れる。それまで待ってほしい。」と言った。

その約束の日の夜、記者さんから電話がかかってきた。

内容は「明日、君と市長さんが直接話をする場を作った。急ですまないがいいかい？」との事で、私は「もちろんです。ありがとうございます。」と言った。

そして現在に至る。

『…そういえば今日、めずらしく又吉見なかったな。ま、ネコにもいろいろあるんだろ』とかなんとか考えつつ歩いていると市役所に着いた。

窓口の人に話をする少し待たされ、そしてとある部屋に通された。そこに市長さんがいた。

市長さんは「どうもどうも。うわさは聞いてるよ。」と言ってきた。私はとりあえず「ありがとうございます。」と答えといた。

そして話し合いが始まった。

モフさんと2人で話し合った案は次の日ざっと考えをまとめて新聞にのつけてもらっており、市長さんもその事を知っていた。なので話は早かった。

結論からいうとそんな個人的・家族的な話は賛同できないとの事だった。

私は決して一家族の事ではなく、記事に対する同じ地域の賛同する人も大勢いるという話もちゃんとした。

市長は終始曖昧な意見で否定的な表現をし、最終的には時間がないと話を切られてしまった。

私は悔しいとかそういった考えは無く、ただ『そうなのか』とその場は考えを決めてしまうことしかできなかった。そしてその日の事を記事にして書いた。

次の日、記者さんから電話があつた。

内容は「君にたくさんメールやFAXが来てる。」との事だった。続けて「大体の意見は『草汰さん頑張ってください。応援してます！』という意見だ。」と言った。

「君はこのままでいいのか？」記者さんが少し間を置いて言った。私はその問いに答えられないでいた。

しばらくして「…良くない。良い訳ないじゃないですか！」と答ええた。

「そうか。君の考えはわかった。その答えを聞きたかった。来たメールやFAXをそっちに送るからこれからの事を良く考えてほしい。」と言い電話を切った。

そしてメールやFAXが送られてきた。

読んでみると確かに応援のメッセージが多かった。

そして一つのメールが特に心に残った。

それは『一人の意見だけを見ないで全体の意見を見るべき。その地域でどんな意見が多いかなどもっと見聞を広めるべきなのでは？私は草汰さんの考えに賛同しています。なのでどれくらいその案がその地域の人に受け入れられるか署名などとしてみてはどうでしょうか？』というメールだった。

「署名か…。考えても無かったけど良い案だな。」と私は思った。その日はメールを読むのやらFAXを見るのやらで考えをまとめるのに終始した。

次の日、玄関を開けると又吉がいた。

喧嘩をしたらしく耳の端っこがかさぶたになっていた。

私はご飯をあげ外に出かけた。

駅前で署名用紙を持って立つ。

なるべく大きな声で「署名お願いします！」と賛同者を求めた。

私のまとめた考えは、なるべく多くの人に集会所作りを市に介入してもらおうと署名を集める事にした。

ただ自分の名前は伏せ、記事も休みをもらい、一から初める事にした。

それは自分の案が新聞という媒体を介さずにどこまで通用するか試してみたかったからだ。

第十二章：署名活動

1日目。

10人ぐらいしか署名が集まらなかった。
ショックだ。

チラシを用意していたけれどももらってくれる人も少ない状況だった。

2日目。

昨日の反省を生かして内容がわかりやすい大きな看板を作った。
30人ぐらい署名をもらえた。
嬉しかった。

3日目。

今日は休日。
意外と止まってくれる人が少なかった。
ただ、数人に励ましの言葉をかけられ嬉しかった。

4日目。

なぜか今日は止まって署名してくれる人が多かった。
そして自分を見て笑っていた。
負けじと私も笑ってやった。
100人ぐらいの署名があった。

5日目。

もう何人止まって署名をもらったか現在ではわからない。
ひっきりなしに止まって励ましてくれたりした。
その日、帰って全ての署名の数を数えてみると900人近くいた。
聞いた話ではその市は人口20万ぐらいらしい。

ちょっと少ないかもしれないがその日で署名は切り上げる事にした。

次の日、その5日間の事をまとめて記事に書いた。

書いている途中、玄関をガリガリする音。

開けてみると案の定又吉だった。

そういえば最近は全然姿を見ていなかった。

しばらくぶりにご飯を食べてった。

少しやせてた。

又吉に食事を与えた後記事を考えていると、記者から電話があった。話の中身はその地域で集会所の場所を提供しても良いという人がいたとの話だった。

そしてその話の中で書く記事の内容を言い、そしてもう一度市長と話をしたいと申し出た。

記者さんと話をした2日後、市長さんとまた話し合いをした。

今度は署名といろんな人の意見を盛り込んだ集会所や実行委員を作る案、そして集会所を提供してくれる人がいるという事を携えて話をした。

長々話し合った結果、『検討してみる』とまたあいまいな形で話が終わった。

5日後までには結論を出すと言われた。

その日の夜、私はおじいさん・おばあさんに1つ考えを言った。

『明日、又吉と出会った公園に花見に行こう』と…。

*（舞台が北海道なので5月以降の桜の開花という設定です）

花見当日、おばあさんはお弁当を作っている。

家の中には今日だけとは又吉が家の中にいた。

今はおじいさんのひざの上ですやすや寝ている。

11時頃出かけることにした。

又吉もめずらしく付いてきた。

草はらの桜の木の下でシートを広げ、3人と1匹で座る。

又吉もそのご馳走のご相伴に預かっていた。

そして今までのやってきた事も2人に正直に話した。

話し終わると2人は涙を流し、『ありがとう。ありがとう』と何度も何度も頭を下げてくれた。

私は恥ずかしくって照れながら「自分のやりたい事をやっただけだよ。」と笑った。

「そう。こんな時間がいつまでも続くといいな。」又吉を見ながらつぶやいた。

第十二章：署名活動（後書き）

次回はお楽しみ『又吉日記4』ですw お楽しみに！

第十三章： 又吉日記 4

<又吉日記 4>

今日、新入りと喧嘩をした。

耳を名誉の負傷をした。
痛かった。

次の日、俺は新入りと喧嘩をするのが嫌で公園の土管の中で一日の大半を過ごした。

翌日。

『あー！腹減ったー！』朝起きてそう叫んでいた。

耳も痛かったが何より腹が減っていた。

あの家に行こうとすると新入りが絡んでくる。

考えた。

そして決めた。

『旅に出よう…』と。

その日のうちに以前居た町に戻る事を開始した。

旅に出て2日後、正直しんどいっす。

道中食いもんはないし、まだ肌寒い。

そしていつもの町へ帰る事を決意した。

『即効で決めて行動する』それがおいらの生き方さ！

もと来た道を戻って3日後、ようやくいつもの町へ着いた。

新入りに素直に『ここに居させてくれ』と泣きついた。

新入りはそれを了承した。

そしてその新入りはその地区のボスになった。

その後、おながが空いていたので若僧の家に行き玄関をガリガリす

る。

久しぶりに若僧に会い、若僧から秘伝のレシピ『ネコまんま』をもたらった。

次の日も飯をもらいに来た。

日が昇りきらない早朝、なんとなく若僧の家の玄関にいた。

そしてなんとなく星を見ながら春の風を感じていた。

その時である『ガチャ』と音がした。

そしておじいさんが出てきて私を見て玄関の戸を開けて何か言ってる。

どうやら私が入って良いと言っているようだ。

おそろおそろ中に入った。

中はホカホカで、おじいさんはいつもの空気と違う何か優しい目をしてた。

そして俺はおじいさんのひざの上で眠るのだった。

起きてみるといい匂いがする。

昼頃、3人は外に出るらしく、おいらも外に出た。

3人で外に出るのは初めてだったのでなんとなくおいらは付いて行った。

そして若僧と出会った公園に着いた。

シートを敷き、いい匂いの元が広げられた。

桜が舞っている。

その薄いピンクの中、3人とおいらで色付く公園。

『また春が来たんだな』そんな事を考えていた。

その日はネコまんまよりもうまいご馳走をたらふく食った。

食べ過ぎの眠気ですとうとする中、『こんな日が続けばいいのにな』とそんな事を考えながら眠りについたのだった。

<又吉日記4終了>

第十三章： 又吉日記4 （後書き）

一区切りついたので書き溜めるまで少し更新を休みたいと思います。
楽しみにしている方がいらっしやれば他の作品でも見て気長に待っ
て下さいねw

ゆっくり更新でもなるべく面白い小説になるよう頑張ります！

第十四章：もう一つの方法

市長さんが返答をすと言っていた5日間はあるという間に過ぎた。私はワクワクしながら返答を待っていた。

昼の2時ごろ、『トゥルルル、トゥルルル』と電話が鳴った。

おばあさんが電話を取り、私に「電話だよ。市役所から。」と渡された。

「もしもし。」と私。

「草汰さんですか？」その声は市長さんではなかった。

そして話をすると、集会所作りは問題があり、金銭面では支援できないと言われた。

私は「市長さんと話をさせてください！」と言ってみたが、その人は無常にも一方的に電話を切った。期待が失望に変わった瞬間だった。

その日の夜、モフさんに結果を伝える電話を入れた。

モフさんは意外とあっさり受け入れ、『他の方法もあるじゃない』と私たちが考えていた違う案と一緒に頑張つてやろうと私を励ましてくれた。

『そうだ。何も方法は一つじゃない。それに僕にはたくさん理解者がいる』と今一度勇気が湧き上がった。

次の日、記事を考えて記者さんに送った。

内容は市長さんとの会話の大まかな内容や次にやろうとしている案の揭示などだ。

この事に関しては他でもない最初は自分が言いだした事だし、今では自分が先頭になって行動しなければならないと思っていた。

…自分が行動しないで誰がやる…。

翌日、私はその地区の公民館にいた。

実は昨日記事と一緒になんとか一時間でも早く、活動を理解してくれる人を集めて話し会いたいという案を相談した。

記者さんは笑って「お前熱いな（笑）。わかった。今日の昼まで待ってくれ。」と電話を切った。

そしてその日の昼、記者さんから電話がかかってきて、明日の昼、近くの公民館で集会を開く事になった。

その事は記事で次の日の朝刊に広告を掲載してもらうとの事で、次の日は偶然にも日曜日だった。

そして話は戻って集合時間一時間前から公民館で待っていた。

『はたして人が来るのか』それだけが心配だった。

第十五章：大会議＜第一幕＞

…一時間後、その公民館には入りきららないほどの人でいっぱいになってた！

それを見てどういう風に話し合いをするか考えた。

そしてその千人ぐらいの中で自分達と壇上で話し合いをしたいという人20人ぐらい手を挙げてもらい、それ以外の壇上に上がってない人は何か発言がしたい時は挙手してもらい、その後壇上に上がってもらって対話するという形式にした。

「まず初めにここにお越しいただきありがとうございます。」という私の言葉で会議が始まった。

私は最初に皆が飽きないようになるべく簡潔にここまで至った経緯を語った。

20分ぐらい喋っただろうか、今に至る経緯を喋り終えた。

そして「今話した中で自分の考えと合わないという方は無理して参加しないでもいいです。」と断った。

私は何人かは帰るだろうと思っていた。

しかし誰も帰る人はいなかった。

みんな内容に理解し、賛同してくれているみたいだった。

私は少し涙ぐみながら「ありがとうございます。」と言った。

そして「これからは多人数で意見を交換したいのでことん話したい人は挙手して舞台の上にながってください。」とそう呼びかけた。そしてその言葉で数十人手を挙げた。

とりあえず考えていた通り進めたいので20人ぐらい選んで壇上の半円陣の座席に座ってもらった。

そうして話し合いが始まった。

まずは「自分の案に対する意見と、他の案がもしあれば気軽に言うてください。」と言った。

自分の考えている今の案はなるべくお金をかけずにボランティア感覚で参加して楽しんでもらうというのが基本だと言った。

参加してもらう人数や年齢は決めずに、なるべく毎日誰かが集会所に来て交代で開いてもらう。

そしてできればその活動を他の人にも知ってもらうため広報を作る事を付け足した。

その事を述べた後、意見を求めた。

ほとんどの人は自分の案に賛成で他の意見は無いという意見だった。そして壇上に上がっている数人から「お金をかけずにボランティアでなんて絶対無理だ。」という意見が上がった。

私はその意見を聞いて考えた。

『本当にこの案でいいのか』と。

数分間考えた末、他の人の意見で考える時間を取った方がいいという提案で休憩をもらうことにした。

休憩中、ドアをノックする音。

「こんにちはー。」なんとモフさんだった！

「モフさんー！来てくれてたのー？！」と喜ぶ私。

モフさんに今の悩んでいる事、ボランティアかお金を取るかという迷いを伝えた。

モフさんは「多額のお金は人を狂わすと思う。私はこの案をボランティアでできなければ止めた方がいいと思う。」と言った。

私は少し考えた。

「…うん。…さすがモフさん！やっぱりモフさんがいないと僕だめだ。」と心を決めた。

「私の意見を聞いてくれる草汰さんは私の心の友だよ。」と笑って言ってくれた。

第一六章：大会議＜第二幕＞

そうして会議がまた始まった。

私は「ボランティアでなければこの案は破棄します！」と言った。休憩中、今、会議に参加してくれている人達も話し合っていたのだろう、私の考えに一致団結して賛同してくれている様だった。

そして私は「今一度言います。私の意見に賛同してくれる人達だけ残ってください。無理に賛同してくれなくてもいいです。」と言った。

すると3割ぐらいの人が帰っていった。

私は別にがっかりはしなかった。

予想はしていたので、次の話に移る事にした。

私は「まずは広報の作成のため、記事にする内容を決定・印刷・配布してくれる人達を決定したいです。」と言った。

すると公民館の中で印刷所をしているという人が名乗り出てきた。

そして少しその人と話し合った。

その人はボランティアで協力したいと言ってきたが、その地区に配布する枚数は結構な負担になると思って断った。

そしてどうすればいいか話し合ってみたが、結論はそれぞれの地区の担当者を決めて個人宅で印刷・配布することにした。

パソコンが普及している今、記事の内容をメールで送ったり印刷したりは個別地区でできる、それを考慮しての事だった。

大体案がまとまったので役割の決定の前に決めておきたい点に話題を移した。

それはその活動を行うボランティア団体の創立とその役員決めである。

基盤はある程度考えており、それはそこに集まってくれた人の多くの挙手で決定した。

役員も一役3人制とし、一人欠けても大丈夫な様に考え、そしてそれ
れも結構あっさりと決まった。

そして最後にはみんなの拍手でその場は終わった。

自分のそこでの役割も終わったのである…。

第十七章：変化の季節（前書き）

めちゃくちゃ久しぶりの更新ですw

ようやく最後まで書き上げ、そしてデータとして書き込みが終了しました。

まあ、ベタな最後になってますが気軽に読んでもらえると嬉しいですw

少しずつのつけます。

楽しんでいってくださいね！

第十七章：変化の季節

翌日、思い出の公園にいた。

桜も散り始めた所だ。

地面が薄いピンク色で綺麗だった。

「ここから始まったような気がする…。」などつつばやいたりする。木漏れ日の中、ひざの上には又吉が寝ていた。

月曜のうらかな日だ。

「さてと…。又吉、起きろ。」

そうして又吉を起こし、2人の家に帰った。

家に着くとおじいさんは私に「モフさんという方から電話があったよ。」と言った。

私は運営の話だなと思いながらモフさんに電話をした。

モフさんは役員会をいつどこで開くかという事を聞いてきた。

私は活動する場所にして良いと言っていた幾人かの人に聞いてみると言っておいた。

「モフさん。実は頼みたい事があるんだ。」とその後、私は言った。

「ん、なに？」とモフさん。

「モフさんに実行委員長の一人になってほしいんだ。」

「私に？委員長は草汰さんじゃないの？」

「僕は次へ旅立たなければいけない。いつまでもここに居る訳にはいけないんだ。」

「そうか。あー、そういえば委員長決めてなかったね。」

「そうなんだ。どんな人かも分からないのに委員長になってもらうのはおかしいから決めなかったんだ。」

「あー。だから私？」

「そう。そして委員長は3人制にしようと思っていたから後の2人はこの町を知っているモフさんが決めてほしいんだ。」

「なるほどねー。でも私が…。」

「お願いします！」

「…わかったわ。私がやります。」

「よかった。これでほつとして次のところ行けるよ。」

「そのかわり困った時は話を聞いてね。」

「当たり前でしょ。これからよろしくお願いします。」

「こちらこそ。じゃ、委員会の場所決まったら電話してね。」

「わかった。」

その後、委員会をする場所を決める電話をいく人かの場所提供してくれる人に向け、場所や日にちを決めた。

それから数日経った後の役員会の日。

気合を入れて外に出た。

すると又吉がいた。

「そうだ。」

と家に入って電話をする。

「サプライズで又吉を連れて行って良いですか？」と聞く。

「いいですよ。楽しみにしています。」と場所の提供者が言った。

外に出て「又吉、行くぞ！」と又吉を抱っこして委員会に向かった。

着いてみると人がいっぱいだった。

そしてモフさんがいた。

「おー！初めましてー！」と又吉に抱きついた。

役員会が始まり、決まった事はまず会員に配るチラシを作る事と、流利的にいくつかの集会所に人を集め、その中で親しくなったお年寄りを若い役員の家に訪問させるという案が決まった。その後のことは役員会の人に任せた。

「お疲れ様！」とモフさんとお茶のペットボトル。

「うん？ありがとう。」とお茶をいただく。

「大変だったね。」とモフさん。

「少しね。」と私。

「いつここを旅立つの？」

「いつだろ。うーん。わかんない（笑）。決まったら言うよ。多分そんなに先のことじゃないと思うよ。」

「そうか。寂しくなるね。」

「これからの事はバトンタッチ。頼むよ。」

「わかった。任せといて。」

と、モフさんと別れ又吉を連れて家に帰った。

家に着くとおじいさんが「新聞社の人から電話があったよ。」と言った。

私は新聞社の人に電話をかける。

そしていつものように次の行き先と日程が告げられた。

「いいいよか。」

それは春も終わるかと言う頃だった。

第十八話： 又吉日記5 （前書き）

おすすめの又吉日記ですw
楽しんでいただけたら幸いですw

次回で最後になります。
ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。
では、次回また。

第十八話： 又吉日記5

<又吉日記5>

それからしばらくはいつもの日常がそこにはあった。

飯の時以外はあの若造に合う事は無い。

若いボスに頭を下げる。

桜の花が散り始めるといった日常だ。

ある日若造に抱っこされていつもの公園に来た。

強制的に連れてこられたのさ！

春の日を浴びていると眠くなつて若造のひざの上で寝た。

穏やかな日がそこにはあった。

そして起こされて私は近所を巡回する事にした。

そして一日は過ぎてった。

一週間ぐらい経っただろうか。

若造が玄関から出てきて目が合った。

すると私を見て若造は家の中に入ってしまった。

何かくれるのかとワクワクしていたら玄関から出てきて私を抱っこ

して歩き始めるではないか。

まあいいやと思いつながら目を閉じた。

…実はとっても暖かくて気持ち良い。

連れてこられたのは一軒の家。

中に入ると見たこと無い人がたくさんいた。

そしてたくさんでられた。

そこでは私は大人気らなかった。

嬉しくてゴロゴロのどが鳴った。

食べ物がほしいとねだったら何かサクサクした物をくれた。
不思議な味がしたけど美味しかった。

そして解散になって若造に抱っこされて公園で別れた。
別に一匹でも寂しくないもん！

<又吉日記5終了>

第十九話：別れ、そして旅立ち（前書き）

最終回です。

短いですが楽しんでいたださいねw
それでは、本編をどうぞ！

第十九話：別れ、そして旅立ち

旅立ちの日が来た。

おじいさんや又吉、それにモフさんといった方が見送りに来てた。そこで私はおじいさんに「お願いがあります。」と言った。

「ん、なんだい？何でも言ってみなさい。」

「又吉の事なんだけど…。面倒見てくれませんか？」

「ああ、わかった。草汰だと思って大切に育てるよ。」

「ありがとう。」

少し涙ぐむ私達。

「行かなきゃ。」

急行の汽笛が鳴りドアが閉まる。

「バイバイ」聞こえもしないのに大きな声で、泣き顔で手を振る。そして次の所へ行くのだった。

<エンドロール>

あれからしょっ中みんなから電話をくれる。

おじいさんおばあさんはモフさんたちのおかげで楽しくやっているようだ。

私はこれから大人になるという長い坂道をゆっくりと登って行くのだろう。

End

第十九話：別れ、そして旅立ち（後書き）

後書きですw

この小説を書き始め、途中、精神系の病院に入院するといった事態もありましたが、何とか完結させて嬉しいですw

17話目ぐらいから後で書き足した内容になっています。

そして一から読み返して完結まで持ち込みました。

なので、後半は少しおかしいのかもしれませんが。

まあ、その所は勘弁してください。

いやー、長かった！

そして付き合って読んでくださった方々、本当にありがとうございました！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6223j/>

草汰と又吉の旅日記

2011年1月13日12時18分発行